



実技授業を終え、デスクワーク中
(嘉悦大学体育館教官室で)

I nterview

好きな現場に戻って

春季関東大学女子1部リーグ戦が行われていた青山学院記念館に、嘉悦大学バレーボール部の試合を見に行った。対戦相手は筑波大学。この日の嘉悦大選手は序盤戦こそ苦しんだものの、2セット目からは徐々に調子を上げ、粘り強いバレーで3対1の勝利。選手のかげ声が応援席まで届き、「攻めろ、攻めろ！」の熱い声援。生の試合はやはりエキサイティングだ。そんな中、コートには終始立ったまま、腕組みし冷静に戦況を見つめる、新監督ヨコゼツターランドさんの姿があった。

好きな現場に戻って
嘉悦大学女子バレーボール部は昨年、全日本大学選手権を制覇し大学日本一になったチーム。これまでも5回の優勝経験を持つ強豪チームだ。そのチームにこの4月、新監督として迎えられたのがヨコゼツターランドさん(44歳)。アメリカ代表としてオリンピックに2回出場。選手引退後はスポーツキャスターとして、さまざまなメディアに出演。バレーボール教室指導、講演、エッセイ執筆など幅広く活躍中のところに、今回の監督就任。
春季リーグ戦終了後、嘉悦大体育



白熱した筑波大学との試合
(赤いユニフォームが嘉悦大学)

館でバレーボール実技授業が終わった直後、まず、監督を引き受けた理由をいきなり伺ってみました。

「バレーボールの現場に復帰したいという希望をもっていました。現場が好きなのです。嘉悦大学は伝統ある強いチーム。常に優勝という2文字を意識している選手の集まりです。伝統を継承しつつ選手たちと一緒に新しい形をつくっていきたくと思っています」
昨年活躍した選手が卒業し、新しいチーム作りの状況の中で春季リーグ戦。選手時代のポジションはセッターで司令塔の役目を担っていたゼツターランドさんにとって、監督デビューは「コートの中での見方と、外から見たことの相違を改めて実感した」ことだった。
バレーボールではプレー中、選手は



試合後のミーティング

瞬時の判断を求められる。練習で経験しなかったことが本番で起きる。「そんなことに気づいたんだ。こんなプレーができたんだ」と監督として言えるような、選手の成長が楽しみだという。

バレーボールとの出会い

ヨコゼツターランドさんはアメリカ、サンフランシスコ生まれ、父はスウェーデン人。6歳の時、母とともに日本に移住。母の堀江方子(ほりえ かみこ)さんはバレーボールの元日本代表選手だった。母は一人っ子のヨコさんには個人競技が合っていると、バレーボールを勧めていた訳ではなかったという。ところが小学5年の頃、母が往年の仲間たちとやっているゲームでメンバーが足りず、ヨコさんが参加させられた。初めて自分が拾ったボールが次につながり、1点を取ったことが例えようも

今度は監督としてコートに立つ、 バレーボールは 私の人生そのもの

嘉悦大学 准教授

女子バレーボール部監督 ヨーコ ゼッターランドさん

なくうれしかった。皆で協力して点を取り、喜びあえるバレーボールが面白く、大好きになった。

「とにかくボールに触っているのが楽しい。初めて自分からこれをやりたいと、心の底から思いました。心の拠りどころができた」と

小学校の時に一緒にプレーしていたのが、全日本クラスの元選手たちとは何とも贅沢な環境だ。「オリンピック選手になって金メダルを獲りたい」という確かな夢が芽生えたのもこの頃だった。

自ら選択し、信じた道を行く

願いを叶えるために文京十中に入り、本格的にバレーを始めた。常に全国大会優勝を目指すバレー部に入るとき、母から「3年間はやめることを許さない」ときつく言われた。「上手くなるためには、どんなことでも耐えられる」とチームメートの倍は練習したという。母親はいつもエネルギーを与えてくれる存在だった。

高校は中村高校へ。全東京メンバーとして国体優勝、全日本ジュニアメンバーとして、アジアジュニア選手権での優勝も経験。バレーボール界から脚光を浴びる存在になった。

当時、オリンピックを目指す選手は高校卒業後、実業団のチームに入るの

が当たり前の風潮だった。トップクラスの実業団から誘いを受け揺れ動いたものの、選択したのは早稲田大学。人間科学部スポーツ科が新設された時期だった。この頃の早大バレー部は関東大学リーグ6部の弱小チーム。しかし、ヨーコさんはアスリートとして人間的な幅を広げ、多様な価値観の中で成長したいという思いが強かった。後のアメリカでの選手時代も、大学で経験したことが大きな支えになったという。6部だったチームを卒業するまでに、2部優勝まで牽引したことは凄いとしかいいようがない。

アメリカで

夢のオリンピック出場

高校2年の時に日本国籍を取得し、重国籍となり、22歳までにどちらかを選択する時期にきていた。その頃、アメリカナショナルチームのオープントライアウト（公開入団テスト）を受けてみたらという話が飛び込んできた。アメリカ国籍であれば誰でも受けられるというフェアなチャンス。オリンピック出場への夢をかけて、アメリカ国籍を選択したヨーコさんは単身アメリカへ渡り、テストを受け、合格したのである。

「システムが違う、生活環境が違う、英語は忘れてしまっているし、で最初

は戸惑うことばかり。『ボール』が共通言語でしたね(笑)」

日本でたたき込んだ基本の細かい技術が武器となり、見事バルセロナオリンピック出場を果たし、銅メダルを獲得。4年後のアトランタオリンピックにも連続出場。日本の大学からアメリカ代表入りという異色のプロセスが、少女の頃から抱き続けた夢を実現させた。そこには、どんなことがあってもブレない強さとチャレンジ精神がうかがえる。

どんな質問にも穏やかに丁寧に、そのロジカルで説得力に富む話しぶりに感服させられる。鹿屋体育大学大学院を1昨年修了するまで、論文書きには苦労させられた。「アスリートのメディアトレーニング」が研究テーマ、これまでにない位必死に勉強したという。「何せ、自分で何十万という授業料を払ったのですから、頑張らなくちゃと思っ」と笑う。

自身の研究テーマを持ち、豊富な国際経験と実績、監督として教育者としての今後に周りの期待がふくらむ。「大学バレー界全体で、日本代表選手を出したい。全体のレベルを上げていくことがその一員としての使命だと思います」現場復帰でますます輝きを増すヨーコゼッターランド監督です。